
整形美人

真名あきら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

整形美人

【Nコード】

N1195W

【作者名】

真名あきら

【あらすじ】

俺の親友・松平は変人で変態だ。

その松平が惚れた相手は、一癖ありそうな美形の男！

骨格フェチの助教授と美形のコンビニ店員。それに巻き込まれる助教授仲間の奇妙な三角関係。FC2ブログより転載です。

整形美人<1> (前書き)

整形を一目で見抜く男・松平と、そのツレで助教授らしからぬガタイの真田。

そして、松平が一目ぼれをした理想の骨格の持ち主の整形美人。それぞれの想いの行方は何処へ？

今回、准教授ではなく、旧名称の「助教授」を使用しております。

整形美人<1>

「どうしたんだ？それ？」

教授の部屋に入った途端、俺は思わず声を上げてしまった。

そこにいたのは、同期の松平幹夫。育ちの良さそうな品のいい、端正な顔立ちと、松平の名から、女子学生連中には殿様などと呼ばれて、助教授の中でも「結婚したいナンバーワン」などと持ち上げられている。

だが、現在の見事に腫れ上がった頬と、その理由を知って、尚もそう云うかどうかは謎だと俺は思っている。

「殴られた…」

実際には『はぐられた』という音に近い発音で、松平が云った。まあ、そうだろう。何をやったかも想像は付く。

「またか。何処で誰に云ったんだ？」

「角のコンビニ。綺麗な骨格なのに、顔と合っていないんだ」

残念そうにため息を吐く。この骨格フェチめ。

「だからって、整形だろうなんて云われて、喜ぶ女なんかいる訳無いだろう！」

「いや、男」

「男？」

「綺麗な骨格だったんだよなあ。純和風でさ。なのに、目元と口元が合ってなくて」

またしても、はぁーっと、心から残念そうにため息を吐く。

俺は駄目だこれは、と放っておく事にした。

そう、こいつは整形を一目で見抜く男なのだ。

こいつと俺が知り合ったのは、高校の理科準備室だった。

いや、それまでも知り合い程度ではあったさ。でも、普通のクラス
メイトって奴。

大体が、こんなカッコいい男の隣になんていたら、自分が霞む。
女どもがちやほやするのも気に食わないしな。

そんなこんなで、同じクラスだったけど、口もろくに聞かない間柄
だった訳だ。

それが変わったのは、二年の秋のこと。

「あれ？」

校内の購買前の自動販売機で、ジュースを買おうとして、俺は財布
が無いのに気が付いた。

財布自体は100円シヨップのものだし、小銭くらいしか入っては
いないが、定期券が不味い。おかんにどやされるのは確実だ。

多分、掃除当番だった理科室の何処かで落としたんだろう。

「しかたねーな」

夕闇の迫り始めた学校なんてのは、あまり気味のいいもんじゃ無い。
しかも理科室は、来年には取り壊される予定の旧校舎にあるんだ。

何処の学校の怪談かって勢いの旧校舎に入って、ぎしぎしと音のす
る廊下を歩いて、突きあたりの理科室のドアに手を掛けたとき、そ
こに誰かがいるのに気付いた。

まあ、何処の学校にもあるように、ウチの学校にも御他聞に漏れず、
骨格標本が動くなんて云う怪談話があった訳で。

そんな作り話にびくつく様な子供じゃないぜー、なんて思いながら
も、ドキドキしながら、そつとドアを開く。

骨格標本の前には、擦り寄るように頬ずりする男がいた。

「キモッ……」

思わず口に出していたが、それは男には聞こえなかったようだ。

うつとりとそれを眺めては触れたり、頬ずりするそいつは、クラス
で嫌と云う程見てきた顔だった。

「松平？」

はっと振り向いた松平が、俺を見る。

俺は啞然と、松平は表情無く、しばらく向かい合っていたんだが、その松平の顔がしばらくすると喜色満面という風に輝いた。

「真田！」

つかつかと歩み寄ってきた、松平が俺の手をがっしと掴む。

「君だけだよ。僕のこれを見ても逃げ出さなかったのは！」

いや、あまりのことに呆然として逃げ出し損ねただけだつて。

「見てくれ、この見事な骨格。素晴らしいだろう！」

「はあ」

俺はもう呆れて、延々と骨格の見事さを褒め称え、それについて論じる松平に付き合ってしまった訳だ。

それ以来、俺たちは殿と家臣コンビと呼ばれて、高校でも注目を集めるようになってしまった。

いや、豊臣と真田、もしくは武田と真田なら、殿と家臣でも納得するが、松平と真田ってつながりねーって。という突っ込みを心の奥に隠しつつ、奴との腐れ縁は未だに続いている。

専攻は『人間工学』。

この帝都大学の大学院はTOPクラスとはいかないが、それなりの研究施設が揃っていたし、何よりも教授の人間離れ振りがすごく、俺たち助教授連が何をやってもお構いなしなところが気に入っていた。

実際、松平がボーナスつき込んで購入した、ドイツ製の骨格模型は堂々と教授室の特等席に飾られている。

お陰で、異様に痩せて長い白髪教授には、俺たちが子供の頃の特撮の悪役から来た、不名誉なあだ名が付いているが、誰もそのことには触れようとしなかった。

整形美人<2>

「お弁当、温めますか？」

綺麗な男の子だ。だが結構、年はいつてるかもしれない。日本語も妙な略し方が無く、綺麗なじゃべり方だった。

「ああ、頼む」

それとなく、男の子を観察する。まあ、俺たち三十台の男から見れば、男の子という感じだが、実際は充分に大人の男だろう。

だが、年下のバイトに交じって働く姿には、何処となくものなれない風に見受けられた。

「ホラ、神楽くん、昨日の」

女の子が囁くように云うのと同時に、当の神楽くんの眉がぴくりとあがる。

振り向くまでもない。そこに立っていたのは、松平だった。

「神楽くん。あの」

「百七十五円です」

話し掛けようとする松平を遮って、神楽くんはカウンターに置かれたコーヒーマシンの値段を云う。渋々と松平が二百円を払った。

「二十五円のお返しです。お待ちなの、」

「タバコ、え」とマルボロ

『お待ちのお客様』と続けようとした神楽くんの言葉を遮って、松平がタバコを買う。

「赤のボックスで？」

「ああ、それ」

「三百円です」

「切手が…」

尚も続けようとした松平の首根っこを捕まえ、俺はカウンターに放置されていたタバコを掴んで、引きずり出した。

「邪魔して悪いな」

がっちりとした体格の俺には、細身の松平をコンビニから引きずり出すくらいは、朝飯前だ。

店の前で解放すると、首が絞まったのか、ゴホゴホと咳き込んでいる。

「お前、何するんだよ」

「それは俺の台詞だっつーんだよ。お前、神楽くんは何云うつもりだった？」

「何、って、まずは謝罪をしてだな」

「それから？」

「もちろん、交際を申し込むに決まってるだろう。あの理想の骨格だぞ？」

やっぱりな。考えていたのと寸分も変わらない答えに、俺は思わず天を仰いだ。

こいつの好みはとにかく、骨格だ。

まあ、いろいろと並べ立ててはいたが、俺にはまったく理解不能なので覚えてもいない。

高校の頃、やはりすばらしく不細工な女に交際を申し込んで、手ひどく振られていた。

いや、振られるって。

最初、からかわれていると思った女の返事は、はかばかしく無かったが、松平があまり真剣なので、さすがに気が咎めたらしい。

女は小さな声で「私の何処がいいの？」と聞いた。

俺的には、クラスでトップクラスの不細工だと思った女だが、その姿は可愛かった。

「意外と可愛いじゃん。松平、目え高いんじゃない？」

と、心の内で褒めたのも束の間。

「そのありのままの骨格を、まったく誤魔化し無く、晒してるのが

素敵だ！」

まあ、結果はお分かりの通りだと思う。

松平には、化粧で誤魔化すことには意味が無い。表の皮一枚のことだと思っっているからだ。

だが、普通は褒めてるとは思わねーだろ。これ。

「なあ、真田。俺、何で殴られたんだ？」

平手打ちを食らったこいつの情け無い顔は、笑うを通り越して憐れでさえあった。

それ以来、こいつのフラレ記録は更新され続けている。

こいつのちよつと変ったところがいいと云う女も稀にはいるんだが大抵続かない。

とにかく、こいつの骨格に掛ける情熱は、もはやフェチと云ってもいいくらいなのだ。

付いていけない女を、俺は責められない。

そして、数年前からはかなりの自分に自信のありすぎるくらいに女しか寄り付かなくなった。昨今のプチ整形流行の所為か、それともそういう女だから整形をしているのか知らないが、こいつがまた、見事にそれを見抜いてしまうのだ。

しかも、本人はまったく悪気無く口に出すのだから、女にとっては堪ったものではない。

「君の、素敵な骨格を削るなんて信じられない」

松平曰くの『もつたいたい』台詞を、浴びせられた女たちは、十中八九、平手打ちをかましてヒールの音も高らかに去っていくのである。

その後には、呆然と頬を押さえた松平と、大抵一緒にいる俺が頭を抱えているのが通常だ。

「とりあえず、仕事中は止める」

コンビニで男に告白されたなんぞ、ひとしきりからかわれるくらいならいいが、繊細なタイプだったりしたら、目も当てられない。

「仕事が終わったら、付き合ってやる」

ぱっと顔を上げた松平の顔が輝いた。すがりつくような視線で俺を見ているが、別にお前が心配とかそういう訳じゃないぞ。

今までは大学の構内だからこそ、許されていたんだ。

ああ、あそこの助教授は変り者だね。で済まされていたのが、今度は大学の外だぞ。

いつもの調子で、告白なんぞされたら、まず変質者決定だ。

「真田、お前ってホントにいい奴だなあ」

「ありがたく思えよ」

俺は今更の松平の肩をぼんと叩いて、歩き出す。

ちくしよう、今夜は多分、居酒屋で飲み明かす羽目になるのは決定だ。

俺は、助教授の薄給の財布を、白衣のポケットの中で握り締めた。

整形美人<3>

帰宅途中の神楽くんを捕まえると、案の丈、非常に嫌そうな顔をされる。まあ、当たり前だ。

「すまなかつた！」

頭を下げた松平にも一瞥を投げただけである。

迷惑だと顔にはつきりと書いてあった。

頭を下げたままの松平を放っておいて、俺は神楽くんに向き合う。

「申し訳ないが、この男の話を聞いてやってくれないか？」

「聞くだけでよろしいんですか？」

警戒もあらわに神楽くんがじろりと俺を見た。気持ちは判るが俺は今回に関してはまだたくの中立だ。人様の恋愛に口を出すほど空しいものは無い。

「もちろんだ。どんな答えを返そうが、それは君の自由だ」

「は？」

しまった、俺は松平の用事が何か知っているからそんな答えになつたのだが、当然神楽くんには理解不可能だったらしい。

いよいよもつてどんな話だと、いぶかしげに眉をひそめられてしまった。唇がきゅっと引き結ばれる。

その表情を見て、俺は言葉の選び方を間違えたことを自覚した。すまん、松平！

「ほら、松平。話をしろよ」

これ以上、ここには居たたまれなくて、俺は未だに頭を下げたままの松平の肩を叩いた。

「しかし、まだ許してもらっていない」

松平がかたくなに頭を上げないのを見て、神楽くんが大きいため息を吐く。

「一体、何に謝ってますか？」

そう云った神楽くんの声は冷たく、顔は明らかに怒りの様相を示し

ている。拳を軽く腰に当てたままの立ち姿は、まさに仁王立ちと云う奴で、それは何処か時代劇の若武者を思わせた。

つり上がり気味の大きい目の瞳が松平を睨みつけている。その顔は確かに綺麗なんだが、何処か違和感があった。その和風の顔立ちを妙に華やかにしているくつきりと引かれた二重まぶた。それが違和感の原因だと気付く。

「君の目を整形だと云ったことだ！ ホントにすまなかった！」

あ、それか。違和感。云われてみて納得した。

「その何が悪いか判ってますか？」

「あ、え…、その。でも怒っているんだろっ？」

「俺が怒ってるから、謝っている訳ですね？」

あちゃー、やっちゃまったよ、松平。俺は隣で、思わず片手で顔を覆った。

「貴方は何故、俺が整形だと思っただんですか？」

「思っただんじゃない！ 判っただんだ！」

松平が、音のするくらい勢い良く顔を上げる。

「骨格と明らかに合っていない、不自然な瞳。君はもっと純和風の美しい顔立ちの筈だ！」

スイッチの入った松平は何処かイッた瞳で、神楽くんの両腕をがしつと掴んだ。神楽くんは呑まれたように松平を見ている。

「この美しい骨格。今時の若者のような、似非西洋人体型とは違う、本当の日本人の体型なのに、頭身が高く、しかもがっしりとしていて。それにそってキチンと付いた筋肉も素晴らしい！」

松平が骨格をなぞるように、神楽くんの腕をさすり、頬ずりしようとした瞬間。

不穏な気配に、俺は松平の首根っこを掴んで引きずり倒した。

見上げると、神楽くんの膝が宙を蹴り上げている。

「中々に過激だね、君も」

「変態に良いようにされる趣味はありませんから」

明らかに舌打ちをした神楽くんの顔は、伶俐な美貌とでも云うのか、

確かに松平の気持ちも判らんでもない。

「待ってくれ！」

くるりと踵をかえした神楽くんは、松平が咳き込みながら呼びかける。

「それで、許してもらえるのだろうか？」

妙に自信の無さげな松平の声に、ちらりと神楽くんが視線を投げた。

「何を、ですか？」

「君のせい……」

「ストップ！」

松平の言葉の奔流を、神楽くんはひとことで封じる。

まあ、ホントに整形しているなら、こんなところで整形整形と連呼されたくは無いやな。

「二度と、その言葉を云わないでください。そうすれば許して上げます」

「ああ、ありがとう！」

松平は単純に喜んでいるが、それでいいのか？ お前、その先の話はどうするんだよ？

俺としては、後顧の憂いを失くす為にも、きつぱりと振られて欲しいんだが。

だが、綺麗な歩みで立ち去る神楽くんを、見惚れるような顔で松平が見送っているのを見ると、これは何を云っても無理だと判断した。

「真田！ ありがとう、お前のお陰だ！」

「いや、俺は何も」

神楽くんの姿が見えなくなった途端、松平が勢い良く振り返り、俺に抱きついてくる。

「お前が話を聞いてくれるように、神楽くんをお願いしてくれなければ、きつと彼は話も聞いてくれなかった」

この男は骨格フェチのど変態だが、馬鹿では無かった。そのくらいは判る程度には聡いのだ。

「神楽くんが謝罪を受け入れてくれた祝杯だ！ 奢らせてくれ！」

いや、それは半歩下がっていたのが、スタートラインに立っただけなんじゃ？

「呑もうぜ、真田！」

肩を叩いて促されると、松平の歩調はスキップせんばかりに、上機嫌なのが判る。さすがに、これに水を注す気にはなれず、俺は渋々と口をつぐんだ。

整形美人<4>

「真田あ。神楽くんのあの脊椎。湾曲の具合の緩やかな曲線が絶妙だと思わないか？」

「はいはい」

細かく語りだす松平に付き合う気は、俺にはまったくくない。

神楽くんの骨格の云々を、俺はさらりと聞き流し、男の常で、居酒屋に集まった客の中の、自分好みの美人に視線を注いだ。

正直、俺には男の脊椎の絶妙な曲線よりは、女の胸の柔らかな曲線の方に興味がある。

但し、松平越しに、だ。

そうすると、奴は俺が奴の話の話を熱心に聞いていると思っらしい。

「お前も判るか。やっぱり、お前はいい奴だ！」

適当にうなずいているだけなのに、松平がテーブル越しに俺に抱きついてきた。

やばい、こいつが酔いつぶれるまでには帰らないと、支払いまで俺持ちになる。

「松平、お前の神楽くんに対する情熱は判ったから、場所変えようぜ」

俺がそういうと、松平は身を離れたが、肩はがっしと掴んだままだ。「そうだな！ 神楽くんの骨格の素晴らしさはこんな場所では語りつくせない。お前の家に行こう！」

以外にしっかりとした足取りで立ち上がると、独り決めた松平は、まっすぐにレジへと向かって来て、俺はほっとした。

「悪いな、松平」

「何の。いつも世話を掛けてるし」

俗物の俺と違って、骨格以外に興味の無い松平は、こういう時の金払いは非常にいい。二人共に平均的なサラリーマンの家庭で育っているが、骨格関連の研究書ぐらいしか使う当てのない松平には余裕

があるが、酒だの食事だの風俗だのに普通に金を使う俺は、いつもカツカツだ。

しかも数年前に分不相応な買い物をした所為で、余計に貧乏になっ
てしまっている。

タクシーを拾って、行き先を告げた。

松平の意識がもったのはそこまでだ。いきなり、俺の肩が重くなっ
たと思っていたら、松平がもたれ掛かって眠っている。

肩を貸すぐらいは我慢するべきだろう。俺は家に着くまでの数十分
の道のりを松平の頭を肩に乗せたまま、タクシーの後部座席に納ま
った。

「すまん」

「どうせ、呑むなら、何処でも同じだ」

道中でちよつとだけ酔いの冷めたらしい松平は、俺に頭を下げたが、
どっちみちココは駅からは遠いし、バスはとっくに出た後だ。

目の前には、一件のマンションが建っている。一階にコンビニがあ
るくらいだが、元々酒屋だっただけあって、酒の種類だけは豊富だ。
すまなさがる松平に、俺は調子付いてあれこれと酒を買わせ、好み
のつまみをそれぞれに買い込んで部屋へと戻った。

男の一人暮らしらしく、適当に乱雑な部屋だが、なれた松平は気に
せずに、散らかっているモノを適当に退けて、じゅうたんの敷かれ
たテーブル前に座り込んだ。

女房が出て行ってからというものの、応接セットのソファは使われる
ことも無い。

松平が背もたれ代わりにして、もたれ掛かるくらいだ。

まあ、こじんまりとはしてはいるが、それでも国立大学の助教授の
買い物としては分不相応なマンションは、もちろん賃貸などでは無
い。

モデルルームのように整えられたキッチンも、今ではカップ麺のお
湯を沸かすことにしか使われなかった。

これで大学から遠かったのならば、俺もさっさと売っぱらって、頭金で消えた貯蓄の一部を取り返したのだろうが、いかんせん、大学から徒歩十分圏内の物件だ。

売って賃貸に移るも面倒くさいし、引越しは意外と金が掛かる。

それに月々の支払いを考えると、それほど大差がなかったのも理由だ。

「神楽くんは俺の理想だ！」

「はいはい。古風で日本人の見本みたいなんだろ？」

但し、骨格が。と付けそうになった台詞を飲み込む。

冷めかけた酔いも、また入れた酒で復活してきた松平は、人目の無い俺の家とあって、押さえが効かない。さつきから、幾度も繰り返す神楽くんの惚気を聞かされ、俺はひたすらうなずくだけだ。

胸骨がどうの、脊椎の湾曲だの、尾？骨の美しさだの。

正直、他人が聞いてもおそらくは惚気だとは判別がつかないだろうそれをひたすら聞いている俺は、我ながら辛抱強いと思う。

「なあ、お前もそう思うだろう？」

「ああ。そうだな」

確かに神楽くんの顔は綺麗だった。

もう少し、俺が若くて節操が無ければ、お願いしたいくらいではあったが、松平ほどの男を夢中にさせるような魅力は感じられない。

「お前が神楽くんの良さを判っても、お前には渡さないからなあ」

「ああ。判った、お前を応援しているから、頑張れ」

俺のそばににじり寄ってきた松平の舌は、すでに呂律が廻っていないかった。

「そう、か。おーえんしてくれ…る…」

間延びしてくる答えを聞くまでもなく、松平はソファにもたれ掛かって眠っていた。

「やっと、寝てくれたか」

俺は松平の身体をソファに引き摺り上げ、毛布を被せる。

俺もごろりと横になって、残った酒を引き寄せた。

ベッドへ行くのもたるい。正直、疲れた。

松平の相手をする事ではない。学生時代から、コイツを流すことには慣れてる。骨格フェチなだけで、コイツ自身は悪い男じゃない。むしろ、研究馬鹿で世間知らずなくらいだ。

俺が疲れているのは、むしろキツイ目をした、あの整形美人の方だ。

「一筋縄じゃいかないぞ」

松平がどう思っているかは知らんが、松平を蹴り上げようとした動きを見ても、そうとうのタマであるのは判る。

俺は松平の前途に不安を覚えた。

整形美人<5>

翌朝、俺が目を覚ますと、松平は俺の筋肉のついた腕を掴んで寝ていた。

それを外そうとすると、まだ、寝ぼけているらしい松平の抵抗に合う。

「お前、筋肉付きすぎなんだよ。せつかくの綺麗な上腕の骨格が台無しじゃないか。肩から腕にかけてのラインが絶妙なのに」

松平はすりすり俺の腕に頬ずりすると、そのまま、またコトリと頭が落ちた。

寝ぼけていても、骨格に対する情熱だけは忘れないのが、なんとも松平らしい。

松平は、俺のこの鍛えた身体がお好みではないらしく、幾度もこの説教じみた台詞を聞かされ続けていた。

「お前はそこから離れられんのか？」

まあ、それが好きで人間工学なんぞ似合わない学問をやっているのだろうが、俺のような俗物にしてみれば、松平の情熱は羨ましい。

俺は俗物の癖に、人との競争も嫌だという我侭な男だ。

そういう俺が適当に勤めていける職場は限られている。大学院から研究室に残ったのも、そこしか行き場が無かったからで、別にこの研究を極めたいとか云う、崇高な目的が合った訳では無い。

まあ、今の時代、松平のような男のほう珍しいのかもしれんが。

「おはようー！」

松平は全開の笑顔で、コンビニの扉を開けた。途端に女性バイトが悲鳴のような声を上げる。

「お、おはようございませすー！」

顔だけ見れば、松平は非常にいい男だ。今時の女が好きそうな中性

的な顔立ちに、今は全開のさわやかそうな笑みを浮かべているのは、何処の女であっても、騒ぐだろう。

ところが、その笑顔を向けられた当の相手の態度は、氷点下のことき冷たさだった。

「いらつしやいませ」

顔は確かに笑っているのだが、その笑顔は、モナリザもかくやという感じの、見事なアルカイックスマイルだ。

よく、モナリザの妖しい微笑みなどと称されるが、俺は実はあの絵が大ッ嫌いである。何を考えているか判らない、心に刃を隠しているような、そんな絵だと思っていた。

神楽くんの笑みは、それを見事に連想させるような、そんな微笑み方だった。

俺はうげつとなって視線を逸らす。

だが、単純な松平はそれをまったく感じていないらしく、棚からカツサンドとパスタサラダとコーヒーを取って、神楽くんの目の前に置いた。

「735円です」

「はい」

嬉々として松平が置いた千円札を機械的に清算すると、

「ありがとうございます」

とにっこりと微笑む。一転して全開の笑顔のように見えるそれを見て、俺はこいつは相当の役者だと思った。

微笑まれた松平は、今にも蕩けそうな顔をしている。

「ああ。また来るよ」

魂の抜けたような返事をするコイツを、俺は幾度か見てきたが、その中でも今回は完璧に嵌っているようだ。

俺はとつと弁当とカップラーメンの清算を済ませ、フラフラと歩く松平の後を追う。

「おい、松平」

「神楽くん、今日は俺に返事してくれたよな？」

肩に手を掛けると、振り向いた松平の表情は、周囲にお花畑でもありそうな雰囲気だった。

「皮一枚の表情があんなに美しいなんて。やっぱり、骨格の良さもたらすものだな」

「いや、あのな」

昨日の素っ気無さが嘘のような対応ではあったが、客に対する笑顔と愛想であって、それ以上でもなければ、それ以下でもない。

いや、どっちかといえば、松平に対してはそれ以下だったかもしれない。目が笑ってなかった。あの愛想が不気味な感じさえするぞ、俺には。

「背筋をピンと伸ばしていると、あの脊椎の美しさが引き立って…」

「あー、はいはい」

恋は盲目とは云うが、今の状態の松平に何を云っても無駄にしかない。

俺はひたすらしゃべり続ける松平を促して、キャンパスへと向かった。

「おや？ 殿はどうした？」

「向坂」

俺は頬張っていたステーキ肉を噛み千切り、顔を上げる。

「ずっと引つ付いてる訳じゃねーぞ、俺たちは」

「でも、一緒にいる確立は高いじゃん。殿には今、女はいないだろう？」

確かに、高校大学大学院と同じ学部で行動してきた為に、俺たちが共にいる確立は高い。

だが、それはあくまで何となくであって、意識して行動を共にしている訳ではなかった。

「女はいないけど、夢中になってる男がいるんだよ」

「へ？ 男??？」

向坂はびっくりした顔をする。そりゃそうだろう。松平の骨格至上主義は知られているが、まさか男でも良かったとは、晴天の霹靂ってやつだろうよ。

「そ、大学通りの角のコンビニ」

「確か、酒屋だったところだろう。あそこの店員か。ああ、えらく綺麗な男がいるって、女生徒が騒いでたな。そんなに綺麗か？」

俺は素直に首を横に振った。別に松平は顔が綺麗だから、神楽くんに惚れている訳じゃない。

このところ、朝はもちろん、昼も夜も松平はコンビニ食だ。神楽くんも客に対しての愛想は崩さないのか、非常にご機嫌なまま、通いつめている。

「神楽くんの骨格について、一日一時間近い講義を聴かされるんだぜ？」

「骨格フェチは変わらずか。殿のお守りも大変だな、家臣は」
だから、俺は松平にお仕えしてる訳じゃねーっての！

「どうせ、すぐに振られるんだろ。また、慰めてやれよ」

「その意見には全面的に同意だが、お前絶対になんか誤解してるだろう？」

経済学の助教授である向坂は、常に俺たちがセットだと考えているらしく、何かと云うと俺と松平が妙な関係であるかのようなニュアンスで話を作るのが困ったもんだ。

どつと疲れた俺は、味噌汁で残りの飯とステーキをかつこんで、学食を後にした。

整形美人<6>

「へ？」

俺は非常に間の抜けた問いを返したと思う。

「だから、神楽くんが付き合ってくれて云ってくれたんだ！」

「付き合っつて…」

俺は呆然としてしまった。松平はもちろん、神楽くんだって男が良
い訳では無い。

松平は確かにいい男だし、男として魅力的ではあると思う。だが、
それは同性を落せるような類のものではなかった。

神楽くんだって、いくら熱心に口説かれても、絆されて承知するよ
うなタイプでは、決して無い。

俺は、別種の心配が頭をもたげてくるのを感じていた。

松平の家は、親は平凡なサラリーマンだが、一応松平家の末裔にあ
たり、一年に一度くらいはきちんと本家で、親族の集まりがあるよ
うな家だ。

妙なやからに目を付けられないとは限らない。

それをどこまで承知しているのか？

俺の頭には、神楽くんの不気味な笑みが浮かんでいた。

「やあ、神楽くん」

にっこりと笑った松平に、神楽くんはうるんな視線を投げる。

当然だが、何故俺がいるのかと問いたげな視線だ。

「お目付け役付ですか？」

「まあな。コイツはこれでも箱入りなんだ。勘弁しろ」

純粹な松平の不安を煽るのは、簡単だった。松平の口から付いてき
てくれと云わせればいい。

「俺のことは気にしなくてもいいから、勝手にやってくれ」

「そうですね。それじゃ、遠慮なく」

神楽くんは綺麗な顔に、不穏な笑みを浮かべて、松平の腕を取って歩き出した。

でれつと松平の綺麗な顔がやに下がる。

俺はとぼとぼと、その後ろを付いて歩くだけだ。

男同士だという事を覗けば、いや、男同士であってもお似合いといわざるを得ない二人だ。

神楽くんの顔は、華やかな花の咲いたような中性的な美貌だし、松平も男臭くないタイプの男前で、鑑賞材料としては申し分ない。周囲からの視線を集めまくりだ。落ち着かない事この上も無い。

もともと、松平はそんなことに頓着をするようなタイプではなかった。

好みの骨格をまじかに鑑賞する機会を与えられて、うっとり眺める目は、どう見てもいつちまっている。

「骨格フェチの変態め」

俺の口から漏れた本音を、神楽くんが耳ざとく聞きつけた。

「それは同意ですね。この人、俺の何処がいいんでしょうか？」

「だから、骨格だろう？」

それ以外に、松平が情熱を注ぐものは無い。

「第一、そう思うんなら、何で松平と付き合う事にしたんだ？」

俺の疑問に、神楽くんは何を考えているのか判らない笑みを浮かべた。

「面白そうでしたから。それにこれだけ口説かれたら、一度くらいは付き合ってみてもいいでしょう。ひと月ほどのお試しです」

言葉も今時の若者らしくないくらいに丁寧で、俺には縁の無い、気品という奴が漂っている。これが松平と並ぶとじっくりとくるのだ。

「お試しねえ……」

そんなのでいいのかと松平の方を見ると、松平はうっとりとお気に入りの鎖骨を眺めている。

駄目だ、これは。と俺は肩を竦めた。

とりあえず、暇潰し程度なら、口を出すことも無い。

俺はさっと立ち上がった。とりあえず、お邪魔虫は退散するとしてしよう。

「あれ、いいんですか？ 大事な殿を俺に預けて」

「ああ。勝手にしろ」

とりあえず、松平の名前を利用してしようとしているのでなければ、どうでもいい。

恋愛沙汰ならば、ちょっとくらいは痛い目を見たほうが、この男にはいい薬だ。

少しは成長してもらわないと。

「へえ。貴方はこの人が好きなんだと思っていましたが」

「は？」

俺と松平の二人が異口同音に聞き返した。

「まさか！」

「キモイことを抜かすな！」

俺と松平が声を上げると、神楽くんはきよとんとした表情でこっちを見上げる。これは、半ば本気でそう思ってたな。

確かにココ数年ずつとつるんでいる所為もあって、そういう冗談のネタにされることは一度ならずあるが、俺も松平もそっちの方はまったくのノーマル嗜好で、相手をそういう対象として考えたことなど、まったく無い。

「もう少し若ければ、君なら考えたけどな。このデカイ男になんぞ、勃つか！」

「神楽くんは、俺がそんな男だと考えていたのか？」

本気で嫌な顔をする俺と、疑われたことが心外だと搔き口説く松平に、神楽くんの綺麗な顔が、ますますきよとんとなった。

整形美人<7>

松平と別れた俺は、ビールとつまみを買いに、コンビニへと寄る。

家に帰っても何も無いし、不精な俺は、当然ながら自炊などしない。

「神楽なら、休みですよ」

耳に入った言葉に、思わず聞き耳を立てた。

店員は、バイトの大学生だ。うちの学部の子だったので、俺も顔見知りである。

手早く買い物済ませ、レジの前に立つ。

「どうしたんだ？」

「真田助教授」

じろりと視線を流すと、神楽くんのことを聞いていたらしい女が、居心地が悪そうに視線を逸らす。

俺のでっかいガタイを目にしたら、大抵はそういう態度を取るだろう。

「従業員のことなんか、客に話しちゃ駄目だろ？」

「あ。そうですね」

まったく、今の若い連中は考え無しだ。俺に云われてはじめて気が付いたという風情だ。

レジを済ませて、出て行き様に女をもう一度睨みつける。

今度は、女はキツと目を上げて、俺を見返した。

気の強そうな良い女だ。三十の坂はとっくに越しただろうに、スタイルも申し分ない。年増の色気がある。

まあ、俺には縁の無い女だ。

面倒ごとは避けたい。女が神楽くんに関わりがあるようなら、一応釘だけは刺したところで、さっさと立ち去ってしまうに限る。

家の門を潜って、ノブに手を掛けた瞬間、だが、その俺の気遣いを無にするような声が掛かった。

「真田、助教授。でよろしいのかしら？」

「ええ」

女の甘い声は媚を含んでいる。だが、視線は探るようなものだ。

「山神神楽のことをご存知ですよね？」

「やまがみ、かぐら？ さて、俺の教え子の中にはいなかったと記憶をしているんだが」

空つとぼけてみせるが、無理だろう。

案の文、女は色っぽい仕草ですつと身体を寄せると、耳元に囁いた。
「あら、ご存知だからこそ、あのコンビニで店員に注意されたんでしよう？」

「まいったね。何が聞きたいんだ？」

俺は肩を竦めて女の目を見返す。

「山神神楽のことを、ホンの少しだけしゃべってくださいれば宜しいのよ」

「さて、タダじゃ嫌だな」

あでやかに微笑んだ女が胸を押し付けてきた。

まあ、あんな色仕掛けをしてきた時点で、そういうつもりがあるだろうと踏んではいたが。

「女房と別れて、一人暮らした。お構いも出来ないが」

念押しするように云った俺に、女は悪巧みをする顔で笑いかける。

「じゃあ、私がおもてなししてあげるわ」

「そりゃ、いいな」

俺は、ドアを開いて、女を家の中へと招き入れた。

コトの終わったベッドで、タバコへと手を伸ばした俺に、女が薄い笑みを浮かべる。

せせら笑うようなそれは、何処かで見たことがある。

何処でだろうか、と思いだしたとき、女が身体を起こした。

「シャワーを借りてもいいかしら？」

「ああ、居間の左手にある」

平静を装って、女を送り出す。あんな薄ら寒い笑みを浮かべる女など、ベッドの相手が終わればさっさとお断りだ。

「整形か、なるほどな」

顔立ちに似たところは無。だが、浮かべる表情は似ていた。

「親兄弟か、それとも親戚か」

とりあえず、松平のことは伏せておくのがいいだろう。

男と恋愛など、どんなリベラルな家族でも、自分の息子となれば話は別だ。

俺はジャージだけ身につけて、冷蔵庫を漁る。

さっき買ってきたビールは、いい具合にキンキンに冷えていた。

リップルを開けて、一気に飲み干す。

「ぶはーっ」

汗をかいた後の冷えたビールはたまらない。

「美味しそうね。私にもいただけるかしら？」

「残念だな。お客様をお迎えするつもりじゃなかったんでな」

女は明らかにむっとした表情を浮かべたが、もう一本の缶ビールとつまみを手にして、居間のテーブルの前にどっかりと座り込んだ俺の前のソファへと腰を下ろした。

バスタオルだけを身体に巻きつけた姿は、扇情的ではあるが、あの表情を見た後では、バスタオルからのぞく組まれたすらりとした足も、げんなりとするものでしか無い。

「女房に出て行かれて、結構経つんでな。お構いは出来ないって云った筈だぜ」

「コトが終わったら、用は無というわけね。はっきりした男だと」

別に俺から誘った訳じゃない。据え膳はいただく主義だ。もちろん、毒が入っていきそうな場合はご遠慮するがな。今日なんぞは、食ってから毒入りだった事に気付いた最悪のパターンだ。

「まあ、いいわ。聞きたいことだけ聞かせていただければ」
俺は心の中で身構える。

「山神神楽のことよ」

「神楽くんのこと、ね」

「神楽と、付き合ってるの?」

俺は、本日二度目の思考停止を余儀なくされた。

整形美人<8>

「一体何処から、そういう結論が導き出されるのか、答えてほしいんだが？」

どいつもこいつも。俺にはその趣味はまったくないっつーんだよ。

「あら、違うのね。あの子の好みのタイプだと思ったんだけど」

「残念だが、俺にはその手の趣味は無い」

「そう」

ならば用は無いとばかりに、女は会話を切って立ち上がった。

ばさりとバスタオルを落とし、下着を着け始める。

いい女だが、これ以上係わり合いにはなりたくないタイプだ。引きとめもせず、缶ビールを煽る。

「神楽とはどういう関係なの？」

「単なる、コンビニの店員と客だ」

「ふーん」

明らかに嘘と判る言葉だが、事実はそうでしかない。

「大学のそばのコンビニだからな。朝晩は必ず寄るが」

「ホントに、それだけなのね」

ふっと息を吐いた女が、するりとバッグからタバコを取り出す。当たり前前の仕草が、妙に優美な感じがした。

「まあ、あんな陰気臭い子じゃ当たり前か」

神楽くんに対する表現としては、いささか不当なそれを、俺は聞き流す。もしかすると、それが神楽くんの『整形』の原因かもしれない。

「貴方みたいなタイプ。あの子は大好きなのよ。ちよっと気持ち悪いかもしれないけど、よろしくね」

そう云った女の顔に、意地の悪い表情が浮かぶのを、俺は見逃さなかった。よろしく、などと云いながら、それを望んでなどいないことが丸判りだ。

嫌な女だぜ。

「アンタにそう云われる覚えは無いな。神楽くん本人にならともかく」

ムカついてそう言い返していた。女の眉がピクリと上がる。しまったと思ったが、口から出た言葉は戻しようが無い。

「大体、アンタ、神楽くんの何なんだ？」

こうなったら、情報だけでも引き出しとくべきだ。口では女に負けるのが判っているが、それでも言い返さずにいられないのは何故だろう。

「私は、あの子の姉よ。弟の交友関係くらいは口を出す権利はあるわ」

「どうみても神楽くんは、口出ししなきゃいけないガキには見えなわけだな」

二十代の半ばになって、恋愛関係にまで口を出されるなんて、ごめんだ。しかも、こんな底意地の悪そうな女じゃ、何を云われるか判ったもんじゃ無い。

「やっぱり、貴方、あの子と付き合ってるんじゃないの？」

「馬鹿馬鹿しい」

吐き捨てるように云って立ち上がると、冷蔵庫からビールを取り出して煽った。

これ以上の会話を続ける気は無い。

女が怒りの表情を浮かべて、キッチンへと踏み出そうとしたとき、呼び鈴が鳴った。

「悪いな、客だ」

さっと玄関へと向かうと、女もムツとした表情は隠さないまま、俺の後を付いてきた。

「悪い、邪魔したか？」

玄関を開くと、松平と神楽くんが立っている。

最悪のタイミングだ。

「いや、この人はもう帰るところだよ」

女はツンと澄ましたまま、ヒールを履いた。明らかに神楽くんの顔は見たはずだが、まったく無視したままだ。

一方の神楽くんの表情が引きつっているのを、俺は見逃さなかった。だが、神楽くんも声を掛けようとはしない。

ヒールの音も高らかに立ち去る女が、神楽くんの前を通り過ぎる。見送っていた松平が、口を開いた。

その瞬間の俺と神楽くんの関係プレーは、とっさには有り得ない程の息の合ったものだ。

羽交い絞めにした松平の口を神楽くんが塞ぐ。

だが、それはすでに遅かった。

「神楽くんの親戚が何か…ッ、」

女が振り返ると、明らかに奇妙な体勢の男三人。しかも、松平の声はしっかりと聞こえたらしい。

「神楽？」

女は呆然と、神楽くんの顔を見つめていた。

おそるべし、松平。俺が寝るまで気付かなかった相似を、一瞬で見抜いたとは恐れ入る。

骨格フェチは伊達ではない。

「お話、聞かせていただけれるわね？」

念を押すように、俺に問い掛けた女に、天を仰いだ。

整形美人<9>

「その顔は何？」

部屋へ戻った女は、いつも通りに床へと座り込む男たちに習った神楽くんを前に、女がずばりと切り出した。

びくりと神楽くんの肩が震えるのを、松平が抑える。

こういう高圧的な物言いをする女を姉にはしたくないもんだ。タダでさえ姉と云う存在には、弟は強くは出れない。

「都合が悪いとだんまりね」

「そう上から見下ろされちゃ、云いたいことも云えないだろう？」

口を挟むつもりは無かったが、あまりな言い草に、つい口の方が勝手に動いていた。

女がギロリとこちらを睨む。俺と松平は軽く女の視線を受け流した。こういう事態になれているわけでも、女の扱いが上手いわけでもないが、それなりに経験はある。

俺は腰を浮かして、松平の横に正座した神楽くんの横に移動した。完全に一対三になった陣容に、女が鼻じろむ。

ソファにイラだったように身体を投げ出し、タバコを口にした。

「で、今日は何の用件でこちらに？」

「貴方には関係の無いことでしょうか？」

タバコをふかしていた女は、俺を睨みつけたが、それはこっちの台詞だと思う。

「関係の無い話なら、余所でやってくれ。ここは借金を抱えちゃいるが、紛れも無く俺の家だ」

女は一瞬、きよとんとなったが、すぐに居住まいを正した。

「失礼いたしました。私は山神皇姫。ここにいる神楽の姉でございます」

そう名乗られてしまうと、俺たちが自分のことを云わないのは、何かアンフェアな気持ちになってくるから不思議だ。

俺よりも単純な松平などは余計にそうだったらしい。

「松平、幹夫だ。近くの大学で助教授をやっている」

姓を云う時にためらうのは、もう松平の癖のようなものだ。殿と呼ばれるも、本当は好きではないことも関係しているのかもしれない。

「真田青海。松平の同僚だ」

俺の名前はセイカイと書いて、アオミと読む。俺の父親は真田十勇士が好きで、こんな名をつけたらしい。青海とか信繁でなかっただけ由としよう。

もつとも、この姉弟の名に比べれば、平凡な名ではあった。

カグラとコウキなんて、今時ちよつとお目にかかれない名だ。

長い黒髪の彼女が、背筋をぴんと伸ばした姿は、まるで日本人形のようなのである。あの口元に浮かんだ不気味な笑みはそのままなのが、余計に作り物めいた印象を与えた。

「神楽は、家を無断で出てきています。様子を見に立ち寄るにも、ある程度の情報がほしくて、周囲に話を伺いました」

無断でといっても、いい大人だ。覚悟の失踪というところか。しかも、顔まで変えて。

「別に無断で出てきたわけじゃない」

黙ったままだった神楽くんが、ようやく口を開いた。

「ちゃんとオヤジには話したし、手紙だって置いてきた」

「あんな一方的な手紙で納得しろって云うの？」

反論の間も与えずに、皇姫が切り返す。キツイ女だ。再び、神楽くんが黙り込んでしまう。

「すまんが、どうして家を出たのか、話してくれないか？ 俺の家

で、家主が蚊帳の外じゃ面白くないんだが」

女を制するように睨みつけ、俺は立ち上がってビールを取りにいった。神楽くんと松平の手土産だ。

冷えたビールを神楽くんの前に置く。

「悪いな、真田」

かちかちになっっている神楽くんに代わって、松平が頭を下げた。勸

めるように、神楽くんの手に握らせると、神楽くんは一気にそれを煽る。

「ぶはー」

息を吐きだした神楽くんの肩を、松平がぽんと叩いた。それに安心したのか、神楽くんは淀みながらも、事情を説明しはじめてくれる。ナンだ？ こいつら、結構上手くいってんじゃないの？

話の内容を要約すると、こうだ。

神楽くんの家は、山神と云う名の示すとおり、山村の巫女の家系だ。代々続く、その辺りの地主でもあり、田舎の大きなお屋敷で何不由なく育ったらしい。

巫女の奉納神楽を舞うのは女で、家の実権は女性が握っている。だが、子孫を残すのは、男性なのだそうだ。

まあ、当たり前だよな。巫女って云うのは、神様への捧げモノで、奉納の舞はその証な訳だ。旦那がいるなんてとんでもない。

一方で、代々の山神の男どもは種をまくだけのやつかいもの扱いされていた。

そんな中で育ってきた神楽くんは、男としての逞しさなど育ちようが無い。父親と共に、屋敷の片隅でひっそりと暮らすのが精々。

実情を知っている村の連中も、ひそひそと陰口をたたき、もちろん子は親の鏡だから、口ごたえしない神楽くんは、近所の子供たちの間では、絶好のイジメのターゲットだっただろう。

しかも、神楽くん曰くのっぺりとした色白の顔は、余計に暗さを目立たせ、神楽くんは、友人もいない孤独な少年時代を送っていた。神楽くんが、遅しく明るくみんなを引っ張っていくような少年たちに憧れを持ったのは、当然の流れだ。

だが、物陰からじつと見つめる神楽くんの憧れの視線は、イジメを通常的に行ってきた少年たちにとっては、自分たちを責めているようにしか思えなかった。

イジメは加速して、それでも自分たちを見ることをやめない神楽くん、レットテルが貼られたのは、自分たちの罪悪感を誤魔化す為だろう。

「ホモだっていわれたんです。見るな、キモイって」

整形美人<10>

「そりやまた…」

気の毒すぎて、掛ける言葉も無い。

見ることさえ出来なくなつた神楽くんは、ますます暗く後ろ向きになる。

そして、高校生になつた神楽くんの前に、都会からの転校生が現れた。

社交的で明るく、頭も良い。田舎の因習にも縛られず、神楽くんにも分け隔てなく接してくれるその子に、神楽くんは友情と感謝の念で接した。

大学生になつて、多くの若者たちが地元を離れていく。地元から大へと通うのはかなりの距離があり、神楽くんは当然ながら地元へと残り、実家の手伝いをしながら、時折帰郷する友人と、楽しく過ごしていた。

誰も神楽くんの周囲にはいなかった。その子以外は。

唯一の友人に友情を越えた想いを抱いているのは、家族にはすぐにはばれる。

引き離され、寂しい想いを抱く神楽くんは、今度は縁談が持ち上がったのだ。

「私たちは神への捧げ物。家族など持つわけにはいかない。当然、神楽に時代の巫女の父親になつてもらわなはいけないのよ」

「おい、それじゃ、神楽くんの意志は何処にあるんだ？」

反論した松平の表情は非常に硬い。

何の自由も楽しみも与えられず、友人からさえ引き離して、今度は家の為の縁談か？

「勝手にしよう？ それで家を出たんですよ」

「当たり前だ。人柱じゃねーか」

俺も思わず、反論していた。

「顔を変えたのは、少しでも明るくなるかと思って」

「お陰で探すのに時間が掛かったわ。神楽、お遊びは終わりよ。帰って頂戴」

居丈高に宣言した女が立ち上がる。今にも神楽くんの手を引いていきそうだ。

俺は女の前に立ち、松平が横から神楽くんの肩を抱く。

「神楽くん、パソコン打てる？」

松平の唐突な問い掛けに、神楽くんが首を捻った。

「教授の研究室で、研究資料をまとめてくれる人を募集している。給料は安いけどね」

成程、目を離さないようにする訳か。

「じゃ、松平と一緒にここに住むか？ 部屋は余ってるし」

俺の元女房は夢見がちな性格で、小さいが、いもしない子供部屋がふたつある。

今の状態でアパートへ返すのは、危険だ。

どうやら、姉には逆らえない性格らしく、さっきだって俺たちが止めなければ、ふらふらと立ち上がりそうな雰囲気だった。

「パソコンは出来ます。あの、ここに住むって？」

「冗談じゃないわ！」

皇姫が激しい調子で立ち上がる。

どうやら、気位の高いお姫様はこの展開にはご不満そうだ。

「貴方たち、一体なんなの？ まるでナイト気取り。可笑しいんじゃない？ こんな地味な子に！」

「地味じゃないと思うがな」

俺は嫌みったらしく、神楽くんの肩に手を置いた。確かに今の神楽くんの顔は、非常に華やいだ美貌である。

皇姫がぐつと言葉に詰った。

「俺はついだが、松平はどうかな？ 殿、どうなさいますか？」

俺は態と松平にそう呼びかける。こんな時代錯誤な女には、松平の名前は有効だろう。

「真田。世話を掛ける」

俺の思惑に乗ったのではなく、松平の改まった頼みごとの時の癖だ。
「承知いたしました」

そう云うだろうことは見越した俺は、素直に頭を下げた。

「神楽くん。コンビニ、しばらく休むかい？」

「いえ、辞めます。迷惑は掛けられない」

聞いていられないとばかりに、荒々しく皇姫が身を翻した。誰も後
は追わない。

バタンと扉を閉める音が響き渡った。

「いいのか、真田？」

「いや、やりすぎた。ここまで煽るつもりじゃなかったんだが」

正直なところ、深く関わるつもりじゃなかったんだが、あんまりな
皇姫の言い草に、思わず口が滑った。

「お前、そんなことやってるから、奥さんに逃げられるんだぞ」
「解ってる」

お前に云われなくても解ってる。俺は口が過ぎるのだ。女房が出て
行ったときの大喧嘩だって、言い過ぎた自覚はある。だが、それが
俺である以上、何度も繰り返し返すのは目に見えていた。

「真田さん。本当にいいんですか？」

「ああ。売り言葉に買い言葉って奴だがな。口から出ちまったもん
は仕方が無い」

頭をかく俺に、神楽くんは居住まいを正す。

「お世話になります」

三つ指付いて、マナーの見本のように頭を下げられて、俺は視線を
さまよわせるだけだった。

その日の内に神楽くんが荷物を持ち込んできた。

家出してきたのに相応しく、大き目のドラムバッグひとつに全ての荷物が入っているらしい。着替えと、暇つぶし用に文庫本が数冊。モバイルパソコンに携帯電話。身の回りの品意外に広げられたのはそんなものだ。

コンビニのバイトは、さすがにすぐに辞める訳にはいかず、シフトの入っている週末までは続けるらしい。

その間は、松平が送り迎えをするということまで片がついた。

「お前は来ないのか？」

「ああ。俺まで迷惑を掛ける訳にはいかんだろう」

遠慮する松平だが、別にそんな必要は無いのにと首を捻る。

「あのな、俺はこれから神楽くんとお付き合いしようと思ってるんだぞ？ やっぱり、不味いだろ？」

あ、そう。割と硬いんだな。お前。

俺が意外そうな顔をしていたのが判つたらしい。松平は口を尖らせたまま、

「これが女相手ならいいがな。俺も神楽くんも男相手は初めてだ。勢いにまかせてなんて出来るか」

「お前、判つてはいたけど、真面目な男だな」

女相手にはかなりモテていた男だっただけに、もつと遊んでるのかと思っていたんだが。俺もかなり自分基準で物を見ていたらしい。

それとも、それだけ本気と云うことか。

「上手くいくよう、祈ってるぜ」

ぼつりと告げた言葉だが、松平はかなり感激したようだ。

いきなり、俺にがばりと抱きついてきた。

整形美人<11>

「真田、お前は何て…」

感激しすぎて言葉にならないらしい松平の背を、俺はぼんと叩く。まったく、むずがゆいぜ。俺は口の過ぎるただのお調子者なのに。

「あの、真田さん。台所使わせてもらっても」

片づけをしていた神楽くんが部屋から顔を覗かせた。ソファの前で抱き合っている俺たちを見て、目を逸らし、パタンと扉を閉める。

「おい、神楽くん、誤解したぞ」

気付かなかつたらしい松平に、俺はきちんと忠告をしたが、それさえ今は耳を素通りしているらしい。デカイ図体で、男泣きに泣き続ける男を、俺はひたすらやり過ぎすしかなかった。

「お風呂頂きました」

頂きましたなどという古風な挨拶も、いかにも神楽くんらしい。

「いや、勝手に使ってくれ。俺は、基本シャワーしか使わないし」
むしろ、風呂の掃除までしてもらっているんだから、ありがたいくらいだ。

「ビール、呑むか？」

「ありがとうございます」

向かい合わせに神楽くんが座る。俺を見る目がなんとなく据わっているような感じなのは、俺の気の所為じゃないだろう。

「やっぱり、あなた方ってそういう仲じゃないんですか？」

ビールを煽って、切り出した神楽くんは、俺は天井を仰いだ。

あの後、神楽くんが簡単な夕飯を作ってくれて、俺たち三人は食卓へとついたので、松平に対しての神楽くんの態度の冷たいこと。

あてつけなのか、俺に対してはやたら愛想がいいものだから、松平はすっかりと萎縮して伺うように神楽くんを見ている。

それを神楽くんは、また綺麗に無視していた。

「あのな。俺はまったくそっちの趣味は無い。ちなみに松平もまったくないぞ。あいつが男がいいって言い出したのは、君が初めてだ」俺の言い訳を、神楽くんは冷めた目線で見る。あれを熱い抱擁とか言い出すなよ？

「その割には、あなた方ってホントにべつたりに見えるんですが？」高校の頃からずっとセット扱いだっただんでな。俺としちゃ、松平と一緒にいると見劣りするんで遠慮したいが、奴の骨格フェチを聞いてやる相手が俺しかいないんだから、仕方無いだろう」

骨格に関する情熱は認めるが、世のオタクの常で、その情熱的な言葉の奔流からは誰も逃げ出す。俺だって聞いている訳じゃない。そこは付き合いの長さで受け流しているだけだ。

「俺だけじゃないんですね」

軽く頭を振って、神楽くんがため息を吐く。

「何が？」

「俺、何でデートの途中で、貴方の家に寄ったと思います？」

「あちゃー、アイツ、デート中に語りだしちゃったのかよ。」

「いつもの休日はどう過ごしているんですか？って聞いたら」

俺の家で、呑んでるって云った訳ね。さもありません。ん？ ということは。

「それって、君の中で答え出てるんじゃないか？」

松平と二人じゃ気詰まりだって云うんだろ？

「まあ、そうなんですけど。こうなった今、俺に拒否権ってありますか？」

あそこで皇姫に会ったことが番狂わせか。

「ここまでお世話になって、真田さんにまで迷惑掛けて。それにあの人、悪い人じゃないのは判りますし」

ナンとも義理堅いことで。

「君の願望なんだろ？俺と松平が出来てればいいってのは」
申し訳無さそうに、神楽くんがうなづいた。

「皇姫のことは俺たちに任せる。とにかく、余計なことは考えるな」
皇姫という女は、やはり姉だけあって、神楽くんのツボと云うか、
逆らえなくなる言葉と云うのを心得ている。

神楽くんが自由になる為には、何よりも奴の支配から逃れさせるこ
とが先決だ。

迎えに来た松平の前で、それだけ云うと、俺は二人を送り出した。
寝なおす時間は無い。中途半端な時間に起きたので、眠気が過ぎる
が、ここで寝たら遅刻確実だ。俺は冷たいシャワーを浴びて、眠気
を追い払った。

シャツとジーンズだけ身につけて、俺はキャンバスへと向かう。朝
から寄るコンビニは、大学通りにある、神楽くんの勤めるところだ。
「おはようございます!」
扉を開くと、満面の笑みで神楽くんが挨拶をする。

たとえ整形だろうが、あの笑顔は綺麗なものだ。しかも、昨日まで
の妙に形式ばったものではなく、それが心から浮かべてくれるもの
であることは判った。

「帰りも松平が迎えに来るから」
レジで清算のときに小声で呟くと、一瞬キョトンとした顔になった
神楽くんが、真剣な目でうなずいた。

研究室に入ると、機材に埋もれるように置かれたソファに転がって、
松平がレポートを読んでいた。先週集めた学生の論文の下読みだ。

「目新しいような奴はいるか?」

「いや、駄目だな。今時の奴はネットで集めた情報で小器用なモン
は書けるが、それ止まりだ」

「仕方が無いな。それはもう風潮って奴だ」

俺は自分の机に散乱した資料の山を脇へと退け、そこに買ってきた
朝食を置いた。

湯を沸かして、小さめのカップラーメンを作り、弁当を開ける。

「真田。お前、神楽くんと何があった?」

「何も無いが…?」

意味が不明だ。カップラーメンをスープ代わりに啜り、弁当を食う手は休めない。

「神楽くんが、やたらとお前のことを聞いて来るんだ。神楽くんが憧れる男の条件って確かにお前だし」

明るくて、リーダーシップがあつて、誰にも分け隔てなくつてか？松平も皇姫も買いかぶりすぎだ。

「俺は単なる調子のいい、流されるだけの男だぞ。家主の機嫌を損ねないようにしているだけじゃないのか？」

「俺にはそれだけだとは思えん」

「面倒くせえな、そんなんなら、お前もウチに泊まればいいだろう」
面倒ことは嫌いなんだ。何で、こんなことで松平ともめにゃならんのだ。

「いいのか？」

「最初からそうしろっていつてるじゃないか」

神楽くんには悪いが、松平の惚れた相手だからこそ面倒を見ているんであつて、それ以上ではない。

後は乗りかかった船って奴だ。

どう流されても文句を云われるスジアイじゃないと、その時の俺は思っていた。

整形美人<12>

夕飯はコンビニで買ったものの他に、俺が味噌汁を作った。

俺より稼ぎの良かった女房は、残業で遅くなることも多く、これだけはよく作っていた。

「美味しいですね」

「そうだろ、こいつ、味噌汁は美味いんだよな」

松平と神楽くんが声を揃えて褒めてくれる。そんなたいしたもんじやないけどな。

「これしか出来ないが、な」

「奥さんは？」

「別れて半年かな」

「十ヶ月になるぞ」

記憶を辿っていた俺に、松平の訂正が入った。

結婚して、数ヶ月ですでに綻びは始まった。俺は口が過ぎるほうだし、女房は気の強い女で何かといえば、俺に張り合っていた。

そういう友人のような関係が新鮮で、俺は何かといえば女房に喧嘩を仕掛けていたようなところもあった。

俺たちの違いがはつきりと出たのは、子供のことだ。

子供を欲しがる女房と、自然に任せればいい俺と。早々と新居に子供部屋を用意するのを、俺は女に良くある夢だと思っていた。

喧嘩の原因はよく覚えていない。

最後には泣いて不妊治療を受けて欲しいという女房に「そんな格好悪いことが出来るか」といい放ったのは覚えている。

途端、女房はキツと口を結んだまま部屋へと引きこもり、翌朝には荷物ごと消えていた。

「とりあえず、女と暮らすのはこりこりだ」

接待で遅くなった女房に、味噌汁を作った俺に、アイツが何か云って笑いかけたっけ。

あれは、何と云ったのだろうか？

「あれ、松平さん。まだいいんですか？」

さすがにいい時間になっても帰らない松平を、心配したように神楽くんが訪ねる。

「今日から俺もここに泊まるから」

「ああ。そうなんですか」

ちらりと俺に視線を流す神楽くんを、俺は無視した。正直、松平と揉めてまで、神楽くんのご機嫌を気にしななければならない理由は俺には無い。

「じゃ、俺はもう寝るから」

すぐるような神楽くんの視線を無視して、俺は切り捨てるように寢室の扉を閉めた。正直、これ以上の気まずい思いはまっぴらだ。

女房が居なくなった今、だだっ広いだけのダブルベッドに潜り込む。とりあえず、二人だけの時間を作ることだ。

実際、皇姫から神楽くんを庇っていた松平は中々に男前だった。ああいう松平を頼りになると思ってもらえれば、見直す機会もあるだろう。

「おい、勝手に寝るな」

酒臭い息が掛かって、俺は布団をめくり上げたのが松平だと悟る。

「お前、やつぱり昨日、神楽くんと何かあっただろ？」

「何もねーよ」

うっとーしいっつーの！ せつかく良く寝てたのに。

俺は布団をかぶりなおして、そのまま丸くなった。それを再び揺り起こして、松平は話を続けようとする。

「本当か？」

「だーッ、うるせえな。お前が今、しなきゃいけないのは、神楽く

んを守ることだろうが！」

しつこく揺り起こす松平に、俺がキレた。

「それとも何か？ お前は惚れた相手が惚れてくれなきゃ、守らねーとかぬかすんじゃないやねーだろーな？ 男なら、見事に守り抜いて惚れさせてみるッ！」

怒鳴りつけた瞬間、しまったと思ったが、もう遅い。

すっかりと酔いの冷めた顔で、肩を落として出て行く松平を、俺は我に帰って呆然と掛ける言葉も無く見送ってしまった。

「やっちまった」

しくじったという思いはある。松平は多分、焦っているのだ。理想の骨格の所為か、何時に無く松平は神楽くんを固執していた。だが、神楽くんの理想とする男は、自分とは掛け離れている。

俺としては、神楽くんみたいな箱入りは、本当の恋をしたことが無いだけで、理想の自分になりたかった男像を、相手に求めているだけだ。

それは恋情とは違う類のもので、大人になれば判る筈だと思う。

なので、むしろ松平がフラれるとすれば、神楽くんがそれに気付いたときだと思っっているんだが。

「大人になつてかかる麻疹は治りにくいからな」

考え込んでいても仕方が無い。俺は頭を切り替えて、寝る事にした。もつとも、こんな精神状態で眠れるかどうかは怪しいモンだったが。

整形美人<13>

「あれ、松平は？」

シャワーを浴びて出てくると、神楽くんが出掛けようとしているところだった。

「もう出掛けてるみたいですけど？」

「おいおい」

それは不味いだろう。

「待て。神楽くん、送っていくから」

俺は急いで着替えて、出て行くこうとする神楽くんの後を追った。

「昨日、カツコよかったですよ」

並んで歩く神楽くんが、クスリと笑う。

「云わないでくれ」

「何故ですか？ あれで松平さんが引いたってことは、俺のことなんか所詮はその程度ってことでしょう？」

「違う！」

俺は松平を良く知っていた。そんな男じゃない。

「落ち込んでるんだよ。松平は。そんな風に思わないでくれ」

自分のことしか考えていなかったことに気付いて、すごく落ち込んでいるんだ。

「やっぱり、真田さんって松平さんのこと好きなんじゃないですか？」

「嫌いで十数年もつるんでる訳がないだろう」

好きの種類は違うけどな。神楽くんが誤解をしているのは承知の上の返答だ。

「だったら、俺にもチャンスありますか？」

「チャンス？って、何の？」

「俺、真田さんが好きです」

「ああ。そう？」

何となく、云われるかとは思っていたから、驚きは無い。

大人になれば、察しぐらいは付くもんだ。

「本気ですから」

睨みつけるように俺を見るのは、軽くないなされたと思っているからだろう。

さて、この後に松平に何て云おうか。

コンビニに着いたのをいいことに、俺は返事もせずさっさと逃げ出した。

面倒ごとはご免こうむる。

研究室に行くと、松平と珍しく教授が揃っていた。

いつもなら、柔らかい表情を浮かべている筈の松平の仏頂面に、研究室に陰鬱な空気が漂っていた。

「真田くん」

長い白髪をオールバックにした宗像教授は、明らかにほつとした顔をして、助けを求めるように俺を見る。

「おはようございます、教授」

俺はなるべく明るく挨拶をして、昨日までに目を通した学生連中の論文の内容についての話に入った。

食事を取りながらになるが、それを気にするような教授では無い。

それに、ぼつぼつではあるが、松平が自分の意見を述べる。仕事には真面目な奴なのだ。

いくらか、空気も軽くなったところで、教授が腰を上げた。

どうやら、立ち去るにも気が引けていたらしい。

教授が部屋に籠もると、俺と松平の二人だけになる。気まずいことこの上なかった。

「松平、お前に話さなきゃいけないことが…」

黙ったままではいられない。多分、今朝の神楽くんの様子では、このまま、知らんフリを決め込ませてはくれなさそうだ。

「神楽くんに告白でもされたか？」

自嘲するような笑いが、松平の口元に浮かぶ。

「松平、誤解するなよ。俺はお前が惚れた相手だから、神楽くんの面倒を見ているんだ。お前の大事な相手が無ければ」

「そうかな。俺が神楽くんを諦めたと云ったところで、お前が神楽くんを放り出すようには見えない」

「そりゃ、買いかぶりすぎだ。俺にはそんな責任感はない。」

「んな訳ないだろ。俺は……」

「お前は自分で思っているより、ずっと優しい男だよ。ただ、口が過ぎるだけだ」

俺を見透かすように見る松平の視線は、居心地が悪かった。

「お前の女房は見る目のない女だったただだよ。神楽くんには、男を見る目もあつた訳だ。俺よりお前を選ぶのは正しい」
俺の中で何かがぶちっと切れる。

「あんな箱入りの小僧に何が判るって云うんだ？」

松平の襟首を掴んで怒鳴りつけた。

「お前より俺の方がいいなんざ、あの小僧の理想の投影だろうが！
お前までそんなのに振り回されんな！ お前の方がずっといい男だ！」

睨み付けた俺を、松平はきよとした顔で見ている。肩で息をす
る俺に向けられた松平の顔が、いつもの穏やかなものへと変った。

「ああ。悪い。そうだな」

「今度、後ろ向きな発言がましやがったら、本気でぶつとばすぞ」
俺は吐き捨てるように、掴んだ松平の襟を放す。

「ちゃんと、今日の帰りはお前が送れよ？ 俺は男の趣味は無いからな。ひたすらしつぽ巻いて逃げ回るぞ」

「やっぱり、告白はされた訳だ」

「ああ。本気だよ。子供の初恋なんて、熱病の一種だ。付き合うほど暇じゃない」

松平も薄々は感じていた訳だ。そりゃ、絡みたくもなるだろう。だからって、俺に押し付けられても困る。

「とりあえず、今日の昼飯はお前のおごりだ」

そのくらいしてもらってもバチは当たらない筈だ。

「OK」

松平が指を立てるのに、俺は手を振って、授業に向かう事にした。

「真田」

呼びかける声に足を止める。

「お前、ホントにいい男だ」

真面目な顔でいうなって、照れるぜ。

整形美人<14>

「真田さん。只今戻りました」

時代劇かよ。思わず突っ込みそうになった言葉を引っ込める。

今日は遅番だと云う神楽くんと、松平が揃って帰宅したとき、俺は珍しく持ち帰った研究書類を読んでいたところだった。

「ああ。おかえり。松平、何もなかったか？」

「誰かにつけられているようなことも無いし、神楽くんの姉が待ち構えてもいない」

神楽くんを軽くいなして、松平に話しかける。

「真田。飯、これでいいか？」

「悪い」

どうぞ、神楽くんの帰宅を待つのなら、買い物は多いほうが店に嫌な顔はされないだろうと、俺の分まで松平に頼んであった。

「真田さん、味噌汁いりますか？ 真田さんが作るのほど美味しくないと思いますが」

俺は神楽くんが差し出すカップ味噌汁を押しやる。

「世話になっっているからって、そこまで気はつかわなくていい。俺は部屋を提供しているだけだ」

「真田、冷蔵庫借りるぞ」

「ああ。ついでにビール取ってくれよ」

神楽くんが恨みがましい目で俺を見ているのは、先刻承知。

だが、あんな落ち込んだ松平などらしくもないものを見せられるよりマシだった。

なるべく神楽くんと時間を合わせないように、尚且つ、神楽くんを見守れるように。俺は帰宅と出勤の時間をずらすことにした。朝はなるべく遅めに起きて、神楽くんのいるコンビニで買い物をして大学へ向かい、夜は神楽くんと松平が家に戻った後に帰る。

このときも、一応コンビニには寄る。
今となつては、早く皇姫が仕掛けてきてくれないかと思っていた。
出来れば、神楽くんがコンビニに勤めている週末までに。
さすがに利己的過ぎて嫌になる。自己嫌悪に陥りながら、俺は家路
を辿った。

角を曲がって、もう少しで家に着く、筈だった。

そこには神楽くんと松平が立ち尽くしている。

「おい、松平。一体、何が…」

そこにいたのは、皇姫と知らない男だった。だが、神楽くんの青ざ
めた顔を見れば判る。

俺とちよつと似た体型の若い男…。

「山神」

「湯島」

お互いに呼びかけたまま、無言で向かい合う。こいつが多分、神楽
くんの初恋の相手だ。

「山神。お前、家出したって本当なのか？」

「ああ。本当だよ」

「皇姫さんは、お前が妙な男に騙されたって」

「それを信じて、連れ戻しに来たんだ」

神楽くんの横顔は何処か寂しそうだ。唯一無二の友人だった男
が、自分ではなく、姉のいう事を信じたのがショックだったのか。
それを支えるように、松平が神楽くんの肩を抱いた。

「お前が山神を誑かしたのか？」

男が松平に食って掛かる。

「神楽くんは立派に一人の男だ。自分の生き方は自分で決めるだろ
う」

松平は冷静にその男と対峙した。こういう時に、松平は神楽くんを
後ろに庇うような真似はしない。

隣に立ち、しっかりと肩を支えるだけだ。

息を吸い込んだ神楽くんが、しつかりと前を見る。

「俺は、二度と村には戻らない」

「山神……。二度と？　じゃ、村に帰っても、お前はいないのか？」
呆然と訴える男に、ちよつとだけ神楽くんが揺れたのが判った。応えてもらえない相手でも、いや、そんな相手だからこそ、可能性にすぎりたくなる。

多くを望まなければいいのではないかと。

「好きでも無い相手と、無理やり結婚させられても、お前は神楽くんに自分の為に、村にいろと云いたい訳だ」

「真田さん？」

神楽くんが驚いて俺を見あげた。

俺がずいっと前に出ると、本当に同じようなタイプであるのは明確だった。

似たような体格と、似たような容姿。俺の方が少しだけ厚みのある身体つきをしているだろう。確かに皇姫が勘違いするのも判る。

「自己中もいいところだな」

「だが、男なんかというよりはいいだろう！」

凶星を指されたようで、男はむつととして反論してきた。自分が地元に戻ったときに、迎えてくれる友人たちには変わらずにいて欲しいってか。

徹底的に頭が足りない。最も俺の嫌いな人種だ。

「それは神楽くんが決めることだ。お前じゃない。何の為に神楽くんは顔まで変えたと思う？」

「それは……」

男が言葉に詰る。後ろでは皇姫が俺を刺すような視線で睨み付けている。

暴力沙汰にでも訴えてくれれば、こつちも楽だったんだが、こつちうからめ手で来られるとはね。

確かにこれならば、神楽くんは自分の意志で田舎へ帰りそうだ。

「神楽くんは、ここで新たに生き直したかったんだよ」

「真田さん…」

もういいと云う風に、俺の腕を神楽くんが引く。だが、それでは俺の気がすまない。

「神楽くんは、何も与えられなかった。自分で何かを掴む為に家を出たんだ！」

男がうな垂れた。神楽くんの前だが、こんな奴は叩き潰しておかないと、為にならない。

「お前、皇姫からいくら貰った？」

ずばりと切り出した俺に、男が目をそらした。

カマを掛けただけだが、確信はついていたらしい。

「まさか。嘘だろう？ 湯島ッ！」

親友であった男に、神楽くんが詰め寄った。箱入りのお坊ちゃん。信じたくないだろうが、人生はそんなもんだ。

「もう、いいわ！」

皇姫がくるりときびすを返す。今日のところはこれで引き上げという訳か。

男も慌てて、神楽くんの腕を振り払った。

神楽くんは呆然と振り払われた手を見つめている。

しばらくして、大きなため息を吐くと、そのまま俺の家に向かって歩き出した。

整形美人<15>

最近使わない家の前のコンビニの扉を神楽くんが開いた。

無言で棚の酒類を無造作にかごへ放り込む。

半分くらいが一杯になったところで、ちよつと立ち止まり、スナック菓子やから揚げや焼き鳥を入れた。

そのままレジへと向かう。

「自棄酒モードかよ」

俺は自分も右に倣つて酒を買い込んだ。

しらふで酔っ払いの絡み酒の相手をするほど、馬鹿馬鹿しいことは無い。

松平は静かに帰っていく神楽くんの後を追った。

酒を山のように買い込んだ俺が、遅れて居間へ入ると、すでに酒の匂いが充満していた。

「遅いです!」

「悪い」

いきなり怒鳴りつけられ、俺は素直に謝った。酔っ払いには逆らわないに限る。

「飲んでください!」

日本酒のコップを差し出す神楽くんの目は完璧に座っていた。

俺は素直に注がれた酒を飲み干す。

その合間に、神楽くんもコップ酒を煽った。良い呑みっぷりだ。

「何で判ったんですか?」

「ああ?」

「アイツが姉さんから金を貰っていること」

「知らねーよ。んなこと」

「は?」

俺の答えに、神楽くんは目を丸くしている。

「単なるあてずっぽうだ。大体、おかしいだろう。帰省シーズンでもないこんな時期に、偶然都会に勤めていた男に、皇姫が会えるか？」

「会えないでしょうね」

「わざわざ、皇姫が連絡を取ったとして、平日の夕方だぞ。その男はどれだけ都心に勤めてるんだ？」

いくら、友人が男に騙されているらしいと聞いても、普通の人間はほとんどが仕事中の筈だ。それに。

「仕事を早退もしくは休んできても、君に逢いたいと云うのなら、もっと必死さがあってもいい」

そういう状態なら、神楽くんのことを本当に無くしたくない親友だと思っているか、神楽くんに惚れてるかだ。あの男には、まったくそんな感じは無かった。

後は人間の動く理由なんて、簡単だ。

「腹が立つ人ですね」

「悪いな。酸いも苦いも噛み分けた汚い大人で」

松平がそつと下を向いた神楽くんの手を取る。

神楽くんはきつと泣いているに違いない。肩が震えていた。

俺はそれに気付かないフリで、酒を煽る。

「神楽くん、食わないんなら、貰うぞ」

焼き鳥に手を伸ばすと、その手を捕まれた。

「やつぱり、俺、貴方がいいです。貴方が誰を好きでもかまいません」

「気持ちだけ、貰っておく」

ニヤリと神楽くんが笑った。強かな男の顔だ。作り物めいた綺麗な顔より、そういう顔の方が好感は持てる。

笑い掛けようとして、顔を上げた瞬間、松平の悲しそうな視線とぶつかって、俺はやばいと我に帰った。

乱暴に神楽くんの手を払い、口に入れた焼き鳥は、味も判らない。

煽るように酒で流し込み、俺はひたすら酒を呑み続けた。

ベッドに倒れこんだのは覚えている。松平が支えてくれたのも。

「松平。早く、あの可愛い子ちゃん、モノにしちまえよ」

「ああ。そうだな」

判っている。これは多分に俺の逃げだ。

松平の好きな相手だからではなく、俺自身が好意を持ち始めている。

もちろん、それはまだまだ、友情以前のものでしかないが、松平が諦めはじめているのが分かる。

松平が神楽くんを応援する立場になったとき、二人に押されて逃げ切れるかどうか。

非常に、分が悪そうな気がした。

誰かの息が身近にあるのに、俺は不穏な感じがして、目を覚ます。酔っ払っている所為か、身体がろくに動かない。

重いまぶたを開くと、そこには神楽くんの顔があった。

「どういつつもりだ？」

押しのけようとして、果たせないのに気付く。

腕は後ろ手に縛られ、身体の上には神楽くんが乗っている。

「貴方が誰のことが好きでもかまわない。そう云ったでしょう？」

「だからって、力づくってのは、どうかと思うぞ」

「貴方にもいい思いはさせてあげますよ」

「もっとグラマーな女なら、俺もこの状況下も楽しめたんだがな」

ニヤリと笑う神楽くんは、作り物めいた顔に、一気に生気が吹き込まれたようだ。

だが、好感が持てるからと云って、いきなりその気になる訳がない。

「貴方の好みは、松平さんから聞きました」

松平、お前口説く相手に、ライバルの情報与えてどうするんだ？

「じゃ、諦めてくれないか。俺も乱暴な真似はしたくない」

「この体勢だつていうのに、余裕ですね」

押さえ込まれてはいるが、腕が固定されているわけでも無ければ、足は自由だ。

反動を使つて、腹の上の神楽くんを跳ね上げると、自由になった足で、思い切り蹴りを食らわせた。

神楽くんの身体がベッドの下へと転がる。

起き上がった俺の身体は、だが、後ろ手に縛られた腕が引かれ、倒された。

「な、にッ」

後ろから羽交い絞めにされ、身体を固定される。

この家にいるのは俺たち三人だけだ。後ろの男は当然…。

「松平さん、そのまま押さえておいてくださいね」

「松平？」

起き上がった神楽くんが、さらりとした前髪をかきあげた。

整形美人<16>

ダブルとは云え、大の男が三人。神楽くんがベッドへ上がると、ぎしりと鳴った。

「止めるッ、松平。お前、何考えてるんだ？」

自分の好きな相手が、目の前で他の男とやろうって云うんだぞ？

「一度でいいんだ。それで神楽くんは…」

「だからって、お前はそれでいいのか？」

俺はもがきながら、松平を怒鳴りつける。一度だけだと云われて納得できるか！

「真田さん」

声を掛けられて、ぎくりとする。神楽くんの整った顔が、俺のすぐ近くにあった。

顎を救い上げられ、唇が重なってくる。

整った顔とすべらかな感触の所為か、男とキスをしているような嫌悪感は無かった。

だが、無理やりに違いない。

唇が離れたところで神楽くんを睨みつける。

「往生際が悪いですね」

「好きでも無い奴とやれないと云う程、ガキじゃないが、縛られたままって云う状態は不本意なんだな」

「でも、縛らないと、貴方はきつと逃げますよ」

「逃げると思うなら、俺をその気にさせちゃどうだ？」

挑発するようにせせら笑ってみたが、神楽くんは悲しげに目を伏せただけだ。

「残念ながら、俺も初めてです。そこまでのテクニクを期待されても困りますよ」

神楽くんが俺の股間に手を伸ばす。

煽り立てる手に逆らえるほど、俺も枯れてない。しかも、顔だけ見

れば神楽くんはそこらの女も敵わないレベルだ。整形の所為で、画一的で作り上げられた感はあるものの、好みと云えないこともない。「松平。お前、本気でいいんだな？」

気を逸らすために、松平に目をやった。

「ああ。責任は取る」

「アホが！」

そんな悲壮な決意を覗かせるくらいなら、止めりゃいいだろうに。

「生憎、俺も男ははじめてなんでね。萎えた責任は取れないぜ？」

「そんな心配しなくてもいいですよ。別にね」

松平を説得するのは諦めて、改めて神楽くんに向き直った。正直、俺の節操無しの息子が役にたたないことは無いだろうが、一応、そんな格好付けでもさせてもらいたい。

神楽くんの手が、俺のジーンズを脱がせにかかると、筋肉質な俺の身体にまとわりつくジーンズは脱がせにくかったらしい。神楽くんは、ボクサーパンツごと尻だけを脱がせるに留めた。

足にジーンズが絡んで、いよいよもって身動きが取れない。

松平が俺の身体を倒し、肩を押さえつけた。

神楽くんが、ゴムを指にはめ、ローションを手取る。

「ま、さか」

この時、はじめて俺は自分の勘違いを悟った。

「おいおい、冗談止せよ」

俺の怯えたような視線に、神楽くんがニヤリと笑った。明らかに楽しんでる。

まわりついでに邪魔なジーンズを何とか脱ごうと、俺はもがいた。

急に暴れただした俺を、神楽くんは冷ややかに見ている。

「往生際が悪いんじゃないか？」

「カマ掘られるとなったら話は別だ！」

大体、俺のゴツイ身体にその気になる奴の気が知れない！

後ろにいる松平の顔に、頭突きを食らわせ、腕が緩んだ隙にジーンズを脱ぎ捨てようとしたが、バランスを崩して頭から勢いよく床に

突っ込んだ。

「そのまま、後ろから押さえつけてください」

ベッドへ引き戻そうとする松平に、神楽くんの無情な声が響く。床にうつぶせになったままの俺に、松平が馬乗りになった。

「ご協力、ありがとうございます。なるべく優しくしますから」

一瞬、何のことが判らなかったが、情けなく突き出した状態のケツに神楽くんの冷たい手が触れる。

俺は羞恥と情けなさで泣きそうだった。

「本当に一度だけです。俺に勇気をください。姉と戦える気力を」

囁きながら、俺の中に神楽くんが入ってくる。優しくするとの宣言通りに、時間を掛けて、ローションで解された入り口は引きつれるような感覚はあるものの、痛みはさほど無い。

いっそ、痛ければ泣き喚いてやることも出来たのに。

薄いゴム越しの神楽くんの律動が、やけにリアルだ。

俺はもう正常な思考をどっかへ飛ばしていた。

ぼたりとシャツ越しに神楽くんの汗が落ちるのを感じた。

ずるりと身体から神楽くんが出て行く。

その妙にリアルな感触に、俺はぞくりと身体を震わせた。

「ありがとうございます」

脱力しきった俺のこめかみに、神楽くんのキスが落ちる。

神楽くんの唇が俺に触れた瞬間、今まで強張っていたのが嘘の様に、払いのけ俺は咄嗟に身を引いていた。

それを神楽くんは悲しげに見つめ、開きかけた唇をきゅっと引き結ぶ。

そのまま背を向けた神楽くんが部屋から出て行く音に、俺は詰めていた息を吐き出した。

整形美人<17>

「殴ってくれてもいいぞ」

後ろからした声に、俺は松平に支えられていたことを知る。

混乱しすぎて、現実を認識できない。

松平は俺を支えて、ベッドへと移動させると、服を脱がせ、かいがいしく身体まで拭いてくれる。

温かな布団と、さっぱりとした身体が眠気を誘ったが、同時に現実
に引き戻してもくれた。

「何で、お前…」

「一度だけだ。それが神楽くんがお前を諦める条件だ」

「そのために、俺を売った訳か？」

神楽くんは俺を諦めさせて、自分が神楽くんを好きにしようって腹
か？

「そんなつもりは無い！ 絶対だ！」

だが、俺の腹立ちは意外な強さで否定された。

「だが、それでお前の気が済まないのは承知の上だ」

がばりと松平が俺の前に土下座をする。

「いくらでも殴ってくれていい。どんな無理も聞く」

松平の真剣な様子に、俺は思わず息を呑んだ。

「責任は取る。そう云ったのは本気だ」

「お前。何故？」

引き換えじゃなきゃ、何でこんなことに加担したんだ？

「神楽くんが自由になる為には、自分で行動しなければ駄目だ。彼

自身が『男』になることが」

そこまでしたいくらいに神楽くんは本気だってことか？

「神楽くんにはとづくに振られた」

俺の疑問は顔に出ているのだろう。松平はさっぱりとした顔をして、
俺を見た。

そこには後悔も悔しさも無い。ただ静かな決意があるだけだ。

「じゃ、何で」

「お前が神楽くんに優しくするのが嫌だった」

「それは、お前の惚れた相手だったからで」

いつもの松平らしくも無い。何でそんなに引き摺っているんだ？

「お前が俺の相手に、そんなに入れ込んだことがあったか？ しかも、神楽くんを護るお前は最高に男前だった」

確かにいつもの相手とは違う松平の本気に、つい入れ込んだことは確かだ。しかも、俺の方がいいと云ってくる相手なんかいなかったしな。

気分が良くなかったといえは嘘になる。

「途中からは意地になってたんだ。いつもなら、とっくに諦めてる」俺の頭の中は疑問符で一杯だ。俺が神楽くんに優しくするのか気に入らなかつた？

それってまるで。

「お前が俺に惚れているみたいに聞こえるんだが？」

「云うな！」

激しい否定に、それが凶星だと知った。

じゃ、余計に判らない。好きな相手が他の相手とやってもいいってのか？

いくら、それで諦めると云われたからって。

「神楽くんの思いつめ方は尋常じゃ無かった。俺が断ったら、もっと剣呑な連中を雇っていたかもしれない」

まったく、純朴と云うか、松平らしい。

「お前、担がれたんだよ。そう云えば、協力すると踏んだんだろう。意外と強かだな」

からくりが見えて、俺はほっと息を吐いた。

最初に俺が感じた神楽くんに対する印象は、まったくもって正しかった訳だ。あの整形美人に、俺たちは振り回されている。

「ところで、松平」

俺は、啞然としたままの松平に声を掛けた。

「とつとと、出て行け！ 俺の半径2メートル以内に近づくな！」
怒鳴り声に、弾かれたように松平が飛び上がる。

松平が扉を閉じたことで、俺はやっと安心して睡魔に身を任せた。

「真田さん。お世話になりました」

翌日、うちに来たときに抱えていたドラムバッグを肩に出て行く神楽くんは、綺麗な顔に何処かふてぶてしい色を浮かべていた。

これなら皇姫の云うことなど、一発で蹴飛ばしそうだ。

それに松平に関わりがなくなったこの美人を、これ以上心配する気も俺には無い。

俺はだるい腰を庇って、意地になって玄関先で神楽くんを見送った。後ろでは、松平が心配そうな視線で俺を見守っている。

ドアが閉じて、神楽くんの姿が消えた。

へたり込みそうになる足を叱咤して、俺がきびすを返す。

今日が土曜で、本当にありがたかった。

ベッドに再び沈み込んだ俺の周囲では、松平がおろおろと俺にまわりつく。

「大丈夫か？ 水はいるか？ 何かいるものは…」

「松平…」

俺のドスの効いた声に、松平の背筋がしゃっきりと伸びた。

「もう忘れたのか？」

半径2メートル以内に近寄るなど言い渡したのは昨日のことだ。

「だが…」

「責任を感じてるなら、月曜まで顔見せんじゃねえ！」

俺の勢いに、松平がさっと腰を上げ、部屋から出て行く。

俺は再び、ベッドに沈み込んだ。

本当は怒鳴るのさえ、キツイが、とりあえずあの野郎のしつけをしておかないと、また、神楽くんの二の舞になる。

「とんでもない、美人だったぜ」

引っ掻き回して、俺をとんでもない目に合わせて、しかも、松平の隠れた感情まで引き出した。

俺たちのこれからを思うと気が重いが、すでに松平との縁を切る選択肢が無い辺りが、俺の甘さかもしれない。

「嘘から出た誠か。こんな展開は想像してなかったけどな」

<おわり>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1195w/>

整形美人

2011年12月11日00時13分発行